

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32661

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770186

研究課題名(和文) 意味役割の区分と文法の関わりに関する日英対照研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study of the Classification of Semantic Roles and Grammatical Relations in English and Japanese

研究代表者

大澤 舞 (OSAWA, Mai)

東邦大学・薬学部・講師

研究者番号：70610830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、意味役割の区分と文法の関わり的一端を明らかにすることを最終目的としていた。研究期間内において、受身文に生起するby句が要求する項が常に動作主を表すという従来の前提が妥当であるか否かを検証した。具体的には、先行研究やデータを基に、by句の項の意味役割が「動作主」と「原因」に区分できる可能性を指摘した。また、日本語の受身文と生起する「ニ/ニヨッテ」句と比較することがその区分の妥当性を支持する方策となる可能性を探った。さらに、意味役割理論において、主題付与一様性の仮説を支持するものと、プロトロール仮説を支持するもののどちらがより当該現象を説明し得るのかという視点から先行研究を調査した。

研究成果の概要(英文)：This study mainly investigated the adequacy of an assumed presupposition that a by-phrase occurring in a passive sentence always introduces an agent argument. In particular, this study (1) pointed out the possibility that the semantic roles of the argument of a by-phrase in a passive sentence can be divided into Agent and Cause, after surveying several previous studies, (2) tried to find out if the comparison of "ni" and "ni totte" phrases in Japanese passive sentences to by-phrases in English passive sentences can support the validity of this classification of the semantic roles, and (3) surveyed two kinds of semantic role theories, Uniformity of Theta Assignment Hypothesis and Proto-Roles Hypothesis, to figure out which hypothesis can fully explain about the semantic role of the argument of a by-phrase in a passive sentence .

研究分野：英語学

キーワード：意味役割 by句 動作主 原因

1. 研究開始当初の背景

英語の受身文に生起する by 句に生じる項の意味役割に関しては、「by の項は、まさに by の力によって、動作主であることが認定される」(中右 (1994)) という考え方が一般的である。しかし、従来、動作主とは何かという定義が一定しないまま (Lee (1969)、Jackendoff (1983, 1987, 1990)、中右 (1994)、Declerck (1994))、もしくは、明確な定義がなされないままその意味役割が認められてきた。その上で、by がその項に動作主性を要求するという「前提」のもと、受身文の意味・統語的研究が行われてきている。このような前提があるなか、Lee (1969, 1970) は、受身文に生起する by にはいわゆる動作主を表す by 句 (例: Mary was hit by John.) と、手段や理由・原因を表す by 句 (例: A child was taken to school by car.) があると論じている。だが、Lee (1969, 1970) の指摘以降、このように by 句の意味を分けて考える研究はほとんど見られず、by 句は動作主を表すという考えが主流となっている。

研究代表者が平成 19 年度以降おこなってきた、単独では容認されないとされている cause 使役受身 (例: *Prices were caused to rise (by the inflation).) の語用論的認可条件に関する研究 (大澤 (2008)、Osawa (2008) など) において、cause 使役受身は、受身一般の認可条件である「受身主語が被動者でなければならない」という被影響性の制約 (Bolinger (1975)) を、文内の意味・統語情報では満たせないため、単独では容認されないが、構文内にトピックとして機能する要素があれば単独で満たすべき条件が当該文脈からの情報によって満たされるため容認されるという記述的一般化が提案されている。これは、仮に by 句が cause 使役受身と共起したとしても、それ自体が cause 使役受身の文法性を保証するものとはならない、つまり、by 句は動作主を表さないということである。そして、by 句が受身主語を被動者にするのではないということになる。しかし、高見 (2009) は by 句が共起し、かつ (一見すると) 単独で容認されると思われる cause 使役受身 (例: The crystal is now caused to lose oxygen by heat treatment.) を挙げ、大澤 (2008) の一般化に対する反例としている。

高見 (2009) は、by 句は動作主を表すという従来の前提に則って論じており、例えば by 句内の heat treatment をいわば擬人的に捉えて動作主として考えている。つまり、cause 使役受身も by 句が表す動作主により受身主語の被動作主性が保証されるために容認されるようになると主張していることになる。これは、大澤 (2008) の仮説と相容れない。高見 (2009) と大澤 (2008) の指摘する両事実を捉えるために、cause 使役受身と共起する by 句の項がどのような働きを持っているのか観察してみると、例えば (by) heat treatment であれば、ある特定の動作主では

なく、その動作主をも組み込んだ「(誰かが行う) 熱処理」という出来事を表しているのではないかということが直観的に考えられる。

この直観が発端となり、cause 使役受身と共起する by 句は動作主を表しているのか否か、もし動作主でないとしたらどのような意味役割を担っているのかということ考察する必要があると考えられ、本研究が始まった。

2. 研究の目的

本研究は、語用論的な観点から、意味役割の区分と文法の関わりの一端を明らかにすることを最終目的とする。この最終目的を達成するための段階的目標が以下の 3 点である。

(1) 英語の受身文に生起する by が要求する項は常に動作主を表すという、当たり前のように考えられてきた従来の「前提」の妥当性を意味・語用論的に検証し、cause 使役受身文をはじめとする現象の分析から、「動作主」と「原因」の意味区分が文法的に重要であることを主張する。

(2) 英語の by 句と、日本語の受身文において動作主を表すといわれる「ニ/ニトッテ」句との比較を行い、英語の by 句が要求する項の意味役割の検証によって得られた仮説の妥当性を示す。

(3) by 句が要求する項の意味役割に関する仮説を基に、従来の意味役割理論の問題点を抽出し、その問題点を解決するための語用論的視点を取り入れた折衷案的アプローチを提案する。

3. 研究の方法

英語の受身文に生起する by が要求する項の意味役割は「動作主」と「原因」とに区分可能であるという主張を裏付けるに足るデータの収集と、その記述研究を行った。

(1) 主に、インターネットと BNC オンラインコーパス、COCA を用いて by 句が生起する cause 使役受身文、by 句の項が無生物の受身文、by means of が生起する受身文の例を収集した。

(2) 母語話者の内省を通して、実際のコーパスには存在しない最小対立となる例 (特に by 句の項が無生物の例において、by 句を because of 句や due to 句と入れ替えた例) を収集した。

(3) 日本語のニ/ニヨッテ句が生起する受身文に関する先行研究を調査した。また、類例をインターネットや、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を利用して収集した。

4. 研究成果

本研究の成果として、英語の受身文に生起する by 句の項の意味役割が「動作主」と「原因」に、連続性をもちながらではあっても、区分できる可能性を指摘したことが挙げら

れる。

受身文に生起する by 句は動作主を表すということが、これまで当たり前のように考えられてきたこともあり、by の意味や振る舞いの変化についての通時的な先行研究はほとんどみられない。そのため、古英語期の歴史的事実を述べた先行研究や Oxford English Dictionary (OED) の記載を整理した。Mustanoja (1960) は、もともとは古英語 (OE) 期には場所を表していた by (OE: *be, bi*) は中英語 (ME) 期には、フランス語の影響もあり、場所、時間、心的近接性、方法、動作主、様態、原因といった意味を表すようになったという。つまり、歴史的にみて、by 句は原因と動作主の両方を表すことがわかる。また、中尾 (1972) は、「受動構造における動作主の確かな例は 14 世紀末から起こる。それ以前の例は疑わしい (pp.356)」、そして「受動構造の動作主を表す of は OE で優勢であった from を 14 世紀末までに置換し、ME 末まで好まれた。しかし、15 世紀になると特に口語では by が of を圧倒していくようになる (pp.368)」と述べている。事実、OED には、1400 年以前の受身文に生起する by の例は載っていない。1400 年の *That Cytee was destroyed by hem of Grece.* が最も古い例である (OED4 s.v. *by*)。しかし、手段を表す用法は 1000 年には存在しており、また原因を表す用法は *by reason that* というフレーズではあるが、1175 年が最も古い実例として載っている。

単純に各用法の発生年を比べてみると、by 句は 10 世紀末頃から手段や原因の意味を表しており、受動文において動作主を表す用法よりも先に生じていたといえる。この歴史的事実と現代英語における用法との関連や、フランス語の影響によって、どのように動作主を表す用法が一般的になってきたのかなど、さらに考察すべき点は多々あるが、この事実観察により、受身文に生起する by 句は常に動作主を表すという従来の前提に疑問を投げかける余地があることが指摘できる。

また、例えば、*How were your parents killed?* という問いに対する答えとして、*By his making a stupid mistake.* が容認される。このとき、by 句の中は、動作主 (He) ではなく、その者の行為やその者が関与している事態を表している。この事実からも、by 句が原因 (理由) を表すと考える余地があるといえる。

特に他動性の高い動詞と共に用いられる by 句の中が有生物 (人) の場合は、典型的な動作主として解釈されやすいが、有生物 (人) が関与している行為や事態は、その有生物に焦点を当てれば動作主解釈が強まるが、しかし、事態全体に焦点を当てれば、それはもはや動作主とはいえず、原因と解釈されると考えられる。意味役割理論において、意味役割は離散的なものであり、ある意味役割は文法 (構造) の同じ位置に常に生起するという主

題役割付与一様性の仮説 (UTAH (Baker (1988))) に代表される立場よりは、意味役割の区別は離散的ではなく、典型的な動作主性をもつ Proto-agent と典型的な被動作主性をもつ Proto-patient を両極端に配置し、意味役割間の連続性を認める立場であるプロトロール仮説 (Dowty (1991)) が、当該現象をより説明し得ると思われる。このような観点から意味役割理論に関する先行研究を調査した。

さらに、現代日本語の二受身と二ヨツテ受身に関する先行研究 (天野 (2001)、杉本 (2000, 2008) など) を調査し、コーパスを用いて実例を収集した。データを整理している段階であり、日英語を比較した記述研究には至っていないが、データの観察から、英語では by というひとつの語が受身文では動作主と原因の両方を表し、その区分は語用論的な意味補充によって行われ、一方、日本語では二ノ二ヨツテという形態的な区別により動作主と原因の差を表すという日英語における傾向の差を仮説として提案できる可能性を探った。

また、このような考え方が、日英語の無生物主語構文の分析にも敷衍され得るのではないかと考えた。例えば、*An apple a day keeps the doctor away.* / 一日一個のリンゴを食べれば医者はいらない。/ 一日一個のリンゴ { で / によって } 医者いらず。という日英語の対照において、英語は *Eating an apple a day keeps the doctor away.* / *You (can) keep the doctor away by eating an apple a day.* とパラフレーズされることから分かるように、*an apple* はリンゴそのものではなく、「リンゴを食べる」という行為の解釈が語用論的な意味補充によってなされる。一方、日本語は形態的に「食べれば」や「で / によって」という語を補うことで「りんごを食べる」という行為を表す。ここから、語用的に意味補充をしやすい英語は無生物主語を多用し、形態的な補充が必要な日本語は無生物主語を使いにくいという両言語の一側面を捉えるような研究へとつながる可能性があると思われる。

< 主要引用文献 >

Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English" *The First LACUS Forum*, ed. by Adam Makkai and Velerie Becker Makkai, 57-80, Hornbeam Press, olumbia, S.C..

Dowty David (1991) "Thematic Proto-Roles and Argument Selection," *Language* 67-3, 547-619.

Lee, P. Gregory (1969) "Subjects and Agents," *Ohio State Working Papers in Linguistics* 3, 37-113, Ohio State University.

中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店, 東京.

Osawa, Mai (2009) *A Unified Approach to*

Pragmatically Licensed Constructions in English, 1-185, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.

高見健一 (2009) 「Cause 使役文とその受身文」『英語青年』2009年3月, 33-36.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

大澤舞「破格構文と言語研究」科研費基盤研究(C)「日本語の自動詞構文と意味に関する研究(課題番号:10201899、研究代表者:天野みどり)構文ワークショップ」2015年9月26日大妻女子大学(東京都・千代田区)招待講演)

大澤舞「英語の受身文に生じる by 句について」第2回筑波英語学若手研究会 2014年9月11日 奈良女子大学(奈良県・奈良市)

大澤舞「可能表現の重複について」第1回筑波英語学若手研究会 2013年9月6日 奈良女子大学(奈良県・奈良市)

大澤舞「受身文を使う理由を(改めて)考える」真岡英語研究会 2013年4月13日 真岡市民会館(栃木県・真岡市)(招待講演)

6. 研究組織

(1)研究代表者

大澤 舞 (OSAWA, Mai)

東邦大学・薬学部・講師

研究者番号: 70610830